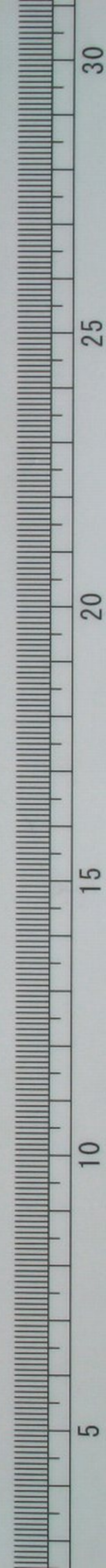


江海風帆子
坤

リ 5
5616
2 4



1412

4 (42)

凡呂4
番 1418
2と

門リ5
號 5616
巻 2

江海風草

筑前國

怡土郡

日本紀仲哀天皇神功皇后筑紫に幸いて熊襲をう
ち給ふ時筑紫伊觀縣主の祖五十迹手御むかひに
出―事ありこれ伊觀郡の國史に出る始なり和名
には怡土郡と書り

怡土の濱―

懐中
名所なり深江村の西子負の原の北の濱邊をいふ
細手糸引繩きるほとに風吹は

國書刊行會

ふ
光る

いとはままで船も寄りける

公領
吉井濱公領

此うへの高山を吉井嶽又は浮岳又西行嶽といふ筑紫の富士是也と云々又筑紫の富士は志摩郡小金丸の可也山をいふともいへり可也山の下に記之

一吉井嶽には元龜の比吉井左京亮隆光居城す同二年未正月十六日松浦の一族草野四郎家房は吉井が領地を取りんとて一千餘人引率て怡土の濱に陣を取

左京亮は小勢なり深江豊前守小金丸民部大輔波多江上總介に加勢を乞心得たりとて岩隈河内守重留六郎を同道して吉井深江と一つになり兩日合戦す十六日に波多江上總介鎮種重留六郎盛家討死す二の目の合戦に草野敗北して草野の城に引入ける西行つくり紀行に

音にきくつくしのふりを來てみれば霞にまかふ雲のうき嶽
公領
加布里公領

一元龜の比原田了巢城代岩隈河内守居城す

深江

深江の海名所なりうへの山を深江嶽又は人壽嶽
ともいふ

一深江嶽二重嶽といふ高山なり深江豊前守良治居城
す永福の末より原田の榮抱となる草野中務大輔鎮
永入道宗揚住す草野は其先祖筑後國の士にして御
井郡草野郷に住せり平家一門九州に逃下りし時西
國士おほくは平家に屬しけるに草野大夫永平始終
源氏に心をよせ忠貞なりしゆ頼朝卿甚悦給ふよ
一東鑑にも見たり元弘建武の比字方に屬し忠功

336

を抽ける事太平記に見たり其後代々相續し天正
年中鎮永入道宗揚に至て太閤秀吉公に亡されて断

絶す
石葉長歌に
よろつ代にいひつ、かねとわたのそこ

沖つふか江のうなかみのみし
子負原

海邊にありす深江の西にあり神功皇后御腰には
さみ給ひし石二つ昔此原にあり破石今は爰にな
し近き比深江村に堀出し新八幡として敬奉るなり
古石にや其實を不知此石をくしみ玉と言ふ

國書刊行會

一日本紀に皇后新羅を征せんとて赴給ふ時まきに開いづき
 胎に當れり皇后則石をとりて腰に挾て祈てのたまいづき
 はく事木はりてかへらん日此土に産れよと其石今
 伊觀縣の道の邊にありと云々萬方葉集第五に筑前國
 怡土郡深江村子負原海にのぞめる丘の上に二石あ
 りと云々
方葉長歌上下略
 いはひ給ひて萬またまなすふたつの石を世の人に
 しめし給ひて万代にいひつゝかねとわたのそこ
 沖の嶋江のうなかみのこふの原にみてつからを
 かし給ひて萬

一くしみ玉の石如鷄子其美好なる事勝て論すへから
 す
 大なるは長一尺二寸圍一尺八寸六歩廻重目十八
 斤五兩
 小きは長一尺一寸圍一尺八寸重目十六斤十兩
 志摩郡

續日本紀元明天皇記に筑前國嶋郡とあり萬
 三代實錄等同前

岐志

一此内に船越といふ浦あり引つといふ名所なり

梓弓引つの一なるなるのりその 人丸

花つむまてはあはさのりそめや 人丸

あつさ弓引つの一なる名のりその 讀人不知

花咲まてにあはぬ君か 讀人不知

梓弓引つの一なるなるのりその 讀人不知

誰うき物としらせそめけん 讀人不知

一岐志の内に新町といふ浦あり文禄の比原田五郎種

門同三郎繁種大友を背き毛利元就に一身して高祖
をぬけ岐志より船に乗中國に渡らんとす大友方に
隠なくいそぎ討手を指向けんは兄弟の者共遁かた
く岐志の波打際にて散り合戦して兄弟共にさ
違て死す行年二十二歳二十歳にてそありける惜哉
強弓の達者希代の勇士なりしとなり今新町の東の
山際海邊より三町程うへに兩所権現と稱して弓矢
神とす

一岐志のうへの高山を親山といふ小金丸村みとこ村
のうへの山なり大友の西政所日野三九郎居城其後

一 小金丸民部少輔良種居城す

一 此親山より日光山の花表石いつる

日光山御鳥居丈尺

鳥居高さ敷石より笠石迄二丈八尺九寸

貫石より下の敷石迄二丈一尺

笠石の横長 六間二尺九寸

兩柱の間下にて二丈二尺

柱の渡り 三尺五寸柱に継月一所宛有

額の長 四尺七寸横二尺六寸七歩

鳥居銘曰 南海を廻りて東山に達すと有 前

後略す

元和四年四月十七日 下黒田長政の時寄進也

一 宗祇筑紫紀行に箱崎の濱より西のかたの眺望を記

せるに夕日のほるぐとわかれるかたに富士に似

たる山ありみとこといふ山なり云々凡七面ありい

つかたよりむかひても同一姿なり

一 此山は筑前可也山といふ名所なり可也の海は山の

西なる入海なり

萬草枕旅をくす一み戀おれは

大判官

かやの山へにさを一かなくも大判官

六帖

かやか野邊邊はいともかや一な嶺の上の

夫木

下をれのかやの山邊邊に鳴鹿の 小町か姉

さこそみたれて妻をこふらめ 知家

夏ふかきかや野の小野の萱筵

みーかき夜半のふしの間もなし為家

姫嶋

六帖

怡土の嶋とあり名所なり今は志摩郡に属す

下紐のいふさりかけてときつれば 人丸

立石崎

夫木

芥屋大門の坤の方に立石といふ所あり此所なり

さかたろす立石崎のーら波は 西行

芥屋

いふ

一芥屋崎岩穴十餘町ふかー奇異の所なり芥屋大門と

出たる岩山の出崎あり其出崎はすべて一箇の岩山

にして小き尾つゞけり其形あたかも亀の首をのべ

1418

たりに似て出崎につゞけり山の尾は細く出崎の岩
山は少大にして高し此出崎の岩の形こまかに見れ
は悉く八九寸一尺三寸五寸或一尺八寸許なる方けた
る石の柱なり其柱はあたかも良工の手を盡し削な
し数百萬をつかねて高く海中に立たるか如くなり
形莊なり此岩山高き事海上三四十間許其そばたて
る事屏風を立たるかごとく城郭の石壁の如し山上
はかへつて前にさしかりて下を木ほへり其山下
に天門とて北にむかへる大なる岩窟あり其内海水
甚深くして其色黒くよのつねの水色に異なり是山

1419
陰にして又水極て深き故なり見り人たそ窟中の
よこ廣き所五間半許其中に舟にのりて入に窟中に
入て見あぐれば天井の如くにして悉く角柱をつか
ねたる端を見りか如し其天井の石柱の上よりた
、事長短ひとしからず其窟中へ舟の入事四十間許
其半過より少東へ曲れり其奥の水なき所舟よりあ
かり行は白砂地なり其地に上りたる人或五七間十
間許行といへとも其奥甚くらくしてすさまじくふ
かく入事あたはず穴の中に蝙蝠多くして面をうつ
然る故古より其極る所をみこくなし里人の云近來

或人其奥を見くため燈燃を燈燃して窟の内にふかく入
て沙土を歩行けるに窟中俄に鳴動し海波起る人皆
おそれていそぎ退き舟に乗て歸帰といふ又此大門の
東の方に大門の岩山を離る、事三四町にして水中
に岩石あり長さ五六間高さ水上より三間餘ばかり
此岩も又四五寸の角柱を横にかさねたる如し是に
も洞穴あり民俗海鱈穴くじらといふ又冬月北風烈し洋
の波此大門の窟を打時は其響数里に聞きこて影えし抑
此所岩壁の奇奇き窟中の異なる事世間佳山水の類
にあらずかの韓柳李杜かすといふとも此美を形容

しかたかまづし誠に天下の奇奇観観なり

此所を一説に八十柱日神直日大直日底筒男中筒男
表筒男底津海童中津海童表津海童九柱の神出觀観
給ふ橋の小戸といふ所のよし一り大門小戸其聲
相通通かくのごとく奇異の境なれば九神のあれま

しけん事さもあるべきものか
新新後後給給遺遺橋橋の小戸の鹽鹽瀬瀬にあらはれて

新道百 橋の小戸の御御杖杖を初初にて
むかしふりに一神を此神 津守國量

いさも清むるわか身なりけり 兼邦

一此所に寛文の末久左衛門といふもの赤毛の女犬を
持り狸をとる事よのつねならず人の云ふくむるに
したかひて山に入て狸をつれ来るさきになて、追
来るにあらず犬山より出来れば狸あとにつきて來
り家の内にしたかひ來る更に犬のけしきにそむく
事あたはず其事國主光之も聞給ひて城下に取よせ
て見給ふ不思議の名犬なり

野北

一此所船かゝりなし永祿の初までは大友の家臣古庄
能登守といふもの住宅す古城跡なし永祿八年に能

登守は志摩郡馬場の城に入る其跡馬場越後と云者
住せしと云々

一此所大なる蛤あり他所に無之といふ味も又美なり
櫻井

一此うへの高山を天下岳といふは古城跡あり城主不
知櫻井神前を浦の城と云古城跡のよし城主は同所
の神主浦権大夫先祖のよし時代不知

一櫻井神社は興土姫大明神と号す八十在津日神直日
大直日三神を祭る所なり先君忠之創立し給ふ神威
靈驗不可勝計事多き故略于此

玄界嶋 けんかい 神

福岡より海上六里なり

一此所に小鷹大明神御座百合若大臣の愛せられし鷹
縁丸を祭ると云々ゆりわか大臣の事古書に見え
ればいふかき事なれども此嶋にゆり若の住れ
と云傳う所残れり縁丸なかれよりし所をよりきと
いふかれとれ舊跡あり又當國夜次郡にも縁丸かつ
はさを休し松あり安藝國安南郡天野村に縁丸
を祭りて鷹の宮あり豊後國大分郡府内にゆり若の
舊跡多く墓もあり別府兄弟か墓も疎見郡石垣村に

1422

あり如此なればひたすら虚説とはいひかたし俗説
には嵯峨天皇御宇に四條左大臣公光の子百合若大
臣九州の藩鎮として豊後國に住す勅をうけて異賊
の襲來をうち平らけ此嶋におかり暫居給ひしを其
家臣別府貞澄弟貞貫心かはりし大臣つかれをやす
め岩かをとを枕にして安臥せられしをすて置歸けり
かくて大臣嶋のふひすと成久しくこゝに住り縁丸
といふ大鷹其内室の夫をうて往來せしなと云傳へ
たり

一玄界の脇の小嶋二つを釋迦牟嶋せきばといふ此

和語心得かたき幸なり南の岩のつらに釋迦の像を彫てありしゆへ釋迦牟嶋といふなり其所くつれて今は其像なし

一釋迦牟嶋に龍穴とて海底幾尋ともなき穴あり箱崎の私司雨の祈をするに此龍穴に来て三寸をそなく雨を祈るに降らずといふ事なしいかなる仔細にて何の比より雨の祈仕來りしに箱崎の社人も不知よし

韓泊

今津より一里半西にあり葉十五に志摩郡韓

亭と書り

一唐泊より南の山を草場村の柑子岳といふ古城山なり大友の東政所臼杵新介鎮屑居城す元龜の比より臼杵進士兵衛鎮氏居城す此鎮氏は元龜二辛未九月前の東政所臼杵新介政所職を辞して豊後に歸る其跡役として進士兵衛柑子岳に來て好色たごりを宗とす因茲志摩郡の士甚うとみけるとなり翌年の春正月十六日原田了榮今津の毘沙門に打出ける進士兵衛是を聞てさあらは討取んとて大勢を率て押寄る原田方は小勢なり思ひよりさる事なれば周章

1423

騷けりされども事になれたる士卒殊に栄は老功
の大將にて程なく爰を切ぬけて高祖たかむに引取る進士
兵衛無念の事にたもひ同く廿八日泊又太郎馬場
越後を案内者として了第栄か居城に押寄る高祖勢落
一合て池田川原今津の内程半奥なりにて合戦す曰杵方敗
北進士兵衛は土州の平等寺といふ禪院にて自言討
死の者進士兵衛を初泊又太郎馬場越後其外侍七十
人若黨弓之者足輕二百人手負百三十八人なり進士
兵衛か墓平等寺の庭庭前に橋をうえてうすき塚とて
今にあり

1424

一沖とろのに大蛇嶋あり西浦より亥の方十三里海中にあり
嶋のめぐりわつかに二十五六丁南北十餘丁東西五
丁餘此嶋に宗像大神社あり此嶋も國主より異船の
來るを察せんため嶋守の士を置るいに一々大蛇あ
りて蟠たれる岩穴ともあり
から泊のこの浦波たぬ日は
藻歸りあれともいへにこひぬ日はなし
夫木 塩はあらくともなりから泊
いつちなかれし人の行衛は
中務御子

國書刊行會

のこのうら舟漕出なゆめ 中務卿子

木ほつかな船路はいつこからとまり

このあし原の名とも木ほす 宗良

志摩浦

其所不祥といへども名寄に當國と記せり志摩郡
の浦をすべていふか

大和路のさほ山嵐吹にけり

しまの浦半に紅葉ちりしく 素性法師

大和路によみ合せたれば大和にあるべきやとた

1425

ほゆれと凡和歌には千里の外的事をもおもひ合
てよめる例多ししまの浦の紅葉のちるを見て大
和路のさほ山嵐を思ひやる心もあるべき事なり
難決

今津

小崎とは唐泊脚崎までの總名を云

一此所往昔は三里程の入海にてありよし依て今も
井樋の泊なといふ所あり

一今津神代に異賊襲来して神軍度々ありし所といふ

異^い魔^ま津^つとも云北^{きた}崎^{さき}を鬼^き多^た崎^{さき}とも書^かり小^こ松^{まつ}重^{しげ}盛^{もり}公^{こう}病^{びょう}
 氣^きの時^{とき}此^{こゝ}所^{ところ}に唐^{たう}土^どより來^きり居^ゐたりし醫^い師^しに療^{りょう}師^しに
 療^{りょう}治^ちをさせんと清^{せい}盛^{もり}のたまひいかとも重^{しげ}盛^{もり}うけか
 はれざりし事^{こと}盛^{もり}衰^{すい}記^きに見^みたり文^{ぶん}永^{えい}八^{はち}年^{ねん}蒙^{もう}古^この使^し
 者^{しや}趙^{てう}良^{りやう}弼^{へい}筑^{ちく}前^{ぜん}今^{いま}津^つに著^{しやく}牒^だ状^{じやう}を呈^{せい}す公^{こう}家^か武^ぶ家^か不^ふ及^{じつ}
 事^{こと}空^{くう}く歸^きると云々其^{その}此^{こゝ}まては唐^{たう}船^{せん}入^い津^つして繁^{はん}昌^{じやう}
 たる華^かなり
 一同^{いどう}所^{ところ}の外^{ぐわい}浦^ぼ北^{きた}の濱^{はま}邊^{へん}には享^{きやう}安^{あん}年^{ねん}中^{ちゆう}異^い賊^{さく}ふせきの九
 め築^{ちく}たる石^{いし}垣^{かき}の跡^{あと}形^{かたち}あり其^{その}石^{いし}ともものこれり
 一今^{いま}津^つに千^{せん}光^{くわう}國^{こく}師^し歸^き朝^{てう}の時^{とき}初^{はつ}て住^すし給^{たま}ふ禪^{ぜん}院^{いん}あり是^{こゝ}

を勝福寺といふ

早良郡

和名抄に早良を以て郷の名とす

長垂山

一生の松原の西につゝきたる松山なり海邊景色よし

生松原

一神功皇后三韓を征し給ふ時此所にて松の枝を取て

さかさまにさして異敵を征して勝利を得べしは此
松いまよとてさし給ふにつるに根出來て繁茂すと
云々

一生の松原の内に壹岐社あり武内の宿補筑紫の政道
のため下に下られしあとにて其弟甘美内宿補帝に讒
言し叛逆の志あるよしうつたへ申ければ武内を殺
し給ふべきに極りたるを壹岐直真根子といふ人日
比忠信誠實の人なりしか武内世になく成給はる天
下の政しかるべからず君の爲國の爲とおもひ真根
子かかたち武内によく似たる故其志を武内にいひ

讒

置いて劔に伏して死すの今生原に真根子

武内大にかなりみひそかに都にのほりなげき申入
られしかば甘美内と武内とさまぐ推向し給ふ其
實否決しかたきゆ磯城川のほとりにて帝の御前
にて探湯をしけるに武内かち給ひて罪なき事明ら
かなりしかば甘美内は罪に處せられけりよし日本

記にあり

あかしみし生の松原こと、はく

思れぬ人もありとこたへよ橘併平

後拾
たひくの千代をはるかに君やみ人相模

國書刊行會

末の松より生の松まで

相模

新古 涼しさは生の松原まさことも

そふる扇の風にあすれそ

太后把皇

姪濱 めいのはま

一神功皇后三韓を退治し御歸朝の時十二月四日此所に著給ふ袖の脚衣を干給ふ故あじめの浦といふよし八幡記にしりせり

一此所は塩屋多し姪濱塩とて名物なり

一愛宕山は鷲尾権現此所に古より鎮座なり愛宕山は

忠之の時山城の愛宕を勸請し給ふなり

一愛宕山を浦山といふ宗祇筑紫紀行にも此山の景色を甚感して記せり北條の探頭北條遠江守英時居城今権現の脚座所本丸のよし

一浦山の西なるを中熊山其西なるを丸隈山といふ北條の探頭斯波左京大夫氏経居城

一幽齋の道の記に姪の濱より安吉の脇指たこせて月利して銘などもよく侍らば主になつべきとて文あり其返事に脇指の代をいふはやすよしの中にた

脇指の代をいふはやすよしの中にた

六月三日姪濱興福寺住持

耳峯玄能

和漢興行に發句ありはしに

凡かほ了惠を松の戸ほそ哉

幽齋

社内六月梅

玄能

一幽齋紀行に浦山の事を可也山のやうに記されたり

傳聞のあやまりなり

一姪濱まに小戸とといふ所ありこれ橘の小戸なりかと言

説も有

一興徳寺禪寺なり大應國師南浦明和尚歸朝して三年

こゝに住せしむ

一姪の濱は二十町程の遠干瀉也天正七年九月戸濱次道

雪原田親秀と生の松原合戦の時初は道雪の先手討

負て敗北す此時家臣小野和泉由布雪荷下知しける

は今うしろの川に高潮みちたれば心のまく引取事

もならし潮にたほれて死しより敵に向て死すやとて

大音あげて下知しければ此詞に力を得三千餘騎取

て返し戦ふ原田勢六千餘騎士大將原田休慶大剛

の者なりしか小野和泉か手にて討死す其勢ひに高

祖の城の二三のくるはまで攻入火をはなつ原田は

詰の丸に引入てたてこもるなと云々

能古嶋 のこしま

名所なり能解浦とも書り
から泊のこの浦波たぬ日は

あれともいもを戀ぬ日はなし

凡吹は沖つしら波かこみと

のこの泊にあまた夜をぬる

新古
いまもかこの浦塩高からし

泊る舟人沖に出つなゆめ

夫木
浦凡はあらくもそなるから泊

人丸

讀人不知

光俊

のこの浦船き出なゆめ

中務

屋良崎

残嶋北の出崎なり俗にあら崎といふ屋良崎此所

なり
沖津鳥かもといふ船はやら崎

たて漕ぐときかれこぬかも

沖津鳥かもといふ船のかへりこは

やらの崎守はやくつけこせ

紅葉松原

一八幡愚童記には後宇多院文永十年蒙古の兵と日本兵と紅葉原にて戦事を記す又太宰小貳系圖に蒙古の大將を百道原にて射殺すと云々百道原紅葉原同じ昔は松原なし白砂なり長政の命にて元和四年博多姪濱の者に毎度小松一本宛うへさせらる

一同所八幡宮は光之産神なり早良郡橋本より寛文六年爰にうつしあめ給領神領百石社僧の寺は妙雲山松壽院西光寺真言宗鳥井額は梶井宮慈胤御筆也

荒戸

ありつ崎と云名所也つと戸と通音なり

一三代實録には那河郡荒津と有て博多の邊をいへるやうに見ゆありつの崎より博多の邊までの事をすべて荒津といへるにや

一荒戸往昔は西南の風にのみ船を繋ぎに万治二年に國主右衛門佐光之百五十間餘の波戸を築出さる石堤の東の端に燈籠堂を置給ふ客泉風波のうれへな

一荒戸山 東照宮は美應元年忠之宮作なり高照山松原院福祥寺と号す叡山の末寺なり社領三百石寄附

1431

せらる貞享三年光之鳥居を立給ふ額は曼珠院宮竹
内良尚御筆なり

一源光院美應二年忠之建立なり始は某院所在に建欲

喜山安穩寺と号す寺領三百石附典せらる寛文八年

十月十日田禄光之新に東照宮の西にうつり立らる

ありつ海しほ干しほみつ時はあれと

いつれの時か我戀さらん

草枕旅行君をあらつまで

をくりきたれとあきたらすこそ

白妙の袖のわかれを難見る而

荒津のはまにやとりするかも

ありつ海われぬさまつりいはひして

はやうつりませわもかはりせて

神さふる荒津の山によする波 土師稲足

まるたや妹に戀わたるなく

土師稲足

草香江

一説深江にありと云々其所不祥福岡城の西鳥飼

の海入海の事なりと云々此説可用

草香江の入江の田鶴のたつきなく 前右大臣忠

1432

新後撰

草香江の入江のたつもしろこゑに

法皇御製

友なきねをや獨なくらく

前右大臣

千代にやちよと空になくなり

ワムル

法皇御製

續後撰

草香江の入江にあさる蘆田鶴の

あなたつし友なりにして

ワムル

大納言旅主

千賀浦

福岡の城外光之隠居館の南下の堀端鳥飼までの間

をいふ

後拾遺

千賀の浦に波よせかくる心地して

ひるま^まなくとも暮しつつかたな

ワムル

道隆朝臣

新後撰

かひなしやみるめはかりを笑にて

猶袖ぬま、千賀のうらなみ

左近中将師良

夫木

都たもふ夢路はしはし友ちとり

聲は枕にちかのうら浪

寂蓮

名寄

唐土もちかの浦^曲の夜の夢

たもはぬかたも遠つ船人

家隆

1433

新六

千賀の浦にやくしほけふり春は又

ひとつ霞と成にけり哉

知家

那珂郡

日本紀神功皇后記にちかあかた難縣と書り日本後記には那

珂と書り

福岡

福岡城下は那珂早良兩郡を兼たり

一小早川左衛門佐隆景金吾中納言秀秋領筑前名嶋に
在城

一高五十二万萬三千百石

黒田筑前守長政從四位下

関ヶ原依軍功慶長五年筑前國一圓賜之名嶋之城

に入其後長政福岡に城を改築居城と元元和九年八

月四日長政死去法名興雲院殿古心道卜居士

一高四十三万萬三千百石

松平筑前守忠之從四位下侍從

元和九年家督相續本知之内秋月五万萬石弟黒田甲斐

守長興東蓮寺四万萬石同市正隆正政に分知寸秋月東蓮

寺分除之而忠之領知高四十三万萬三千百石忠之承應

三年二月十二日死去高樹院殿僕春宗英居士

一高四十三万三千百石

松平右衛門佐光之從四位下侍從

美應三年家督相續延寶五年家綱公之御時直

領四万石故有被差上候處達上聞先祖以來之領

知た丁故被返下之旨御直に上意也依之光之領知四

十数万三千百石元禄元年元年依願隱居

一高四十七万三千百石

松平肥前守綱政從四位下侍從

元禄元年家督相續外新田五万石弟黑田伊勢守長清

に配分直方に居住也

1435

一福岡の城は慶長五年長政入國以後同六年那珂郡福
崎に新に城郭を營作し給ふ國中の端城とも同十
二年此間成就す

端城は

上座郡

左右良

小石原

夜須郡

彌長

嘉摩郡

益富

鞍手郡

鷹取

遠賀郡

黒崎

若松

一福崎を改て福岡と号する事黒田の先祖近江佐々木の一族にてありしが長政の曾祖父黒田右近大夫高政故有て備前國邑久郡福岡の里に移り住給ふ其子下野守重隆も備前福岡の座なり其本を思ひ出て福岡と稱し給ふとなり

水鏡天神

一福岡の東橋口にあり菅公左遷の御時四十川のなかれにのぞみ水かきみを見給ひ罪なくして左遷心中悲歎のあまり御かたちのたとろへ給ふ事を觀して一夜白髮の歎をなし給ふとなり則其所に依て社を

建たり

住吉

一博多の南にあり伊弉諾尊小戸橋檍原にてみろきはらひ給ふ時出現し給ふ九神の内なり底筒男中筒男表筒男三神すへて住吉大明神とす神功皇后三韓を征し給ふ時第一此御神の冥助ありし事日本紀をばしめ古書にしるし香椎箱崎の縁起等にも詳なり世人のしる事なれば委は不記

一日向國小戸橋檍原といふも當國なる事其仔細あり攝州住吉長門の住吉等は皇后御歸朝已後建給ふ御

社なり筑前住吉は出現の本所にて遠きむかしより
神社ありの神社あり三十石宮司坊松花山圓福寺
續古今西の海憶か原の塩路より

あらはれ出しすみよしの神

ト部兼直

新撰 橋の小戸の塩瀬にあらはれて

むかしふりにし神そ此神

津守國重

一むかしは袖の湊より此住吉の北西東に及て入海つ
きけり宗祇法師紀行にも住吉の松の海邊海邊とかけ

一此神木は松にていにしへより三またにて有けると
かやこれ三柱の御神の神体をしめし給ふと云々兵
火なとにて焼たりしにも又同く三またに生かば
れりといふ今の松も三またにして大木也又一夜松
といふ松あり永享の比此松社にさはりてあし、と
てきふべににさためけるに二三日の内に立なをりた
るよし紀行にしるして宗祇の歌に
神垣の松にそたのむことのはも

直なる道にたちやなをると

其松はつれといふ事とさたかならざりしに天和年中御社の東北の隅なる松神殿の軒にさはるゆへ伐へきよし沙汰ありしに一兩夜のうちに半よりたちなをりぬ近き比の事なれば人皆見事なり此外故實さまぐなればしるしにいとまなし

一神社の北にとなりて東福寺の僧徹書記康正の比來り住し松月菴の跡あり永禄年中立花氏重根再興此山和尚を用山と東林寺に

附し末菴とす故實略之

菟嶋

降らばふれ三笠の山路ちかければ

檜垣姫

みのしまさてはさして行てく

つたれ 檜垣姫

同 村雨にぬる衣のあやにくに

源重之

けふみのしまの名をやからまし

つたれ 源重之

博多

一嵯峨天皇弘仁五年今至宝永元年の記に新羅人筑前國博多津につく事を記せり遠き代よりの名なすへし唐土の書に覇家臺八角島なども書り

一大明第元儀が著す所の武備志の日本考に國に三津

1438

あり皆商船の聚る所海に通る江也西海道に坊津属

薩州

花旭塔津属筑前州洞津属伊勢州三津たゞ坊津を總

路とす各船往來に必よる花旭塔津を中津とす地方

廣濶して人煙湊集す中國の海商此地に聚らざるは

なし洞津を末津とす地方又山城と相近けれとも貨

物或は備り或はかくたい中津にはあらず物なし

と書く

一天文~~女~~一年より博多の大明より高船の來る事やみ

ぬ今寶永元年~~追~~八年なり

一松はや一は高倉院安元元年小松内府重盛公黄金三

千兩大宋國へ渡り育玉山に施入し給ふ其使先博多

に下り宋に渡さる博多の者も重盛公の恩を蒙り故

公歿後に及んで其恩を報せんとて正月に松はやし

をす事と云々故にはや一ことに松殿や一小松

殿やとうたふ

一陣負外郎といふ者唐土台州の人なり後光嚴院應安

二年乱をさけて日本に來り博多に住す上京して將

軍義高公に合藥等を獻す就中透頂香甚稱美あり京

西の洞院に宅給ふ其子孫世々透頂香を傳ふ今も西

1439

洞院四條上町に其子孫あり相州小田原家僕をつ
かはしうらしむ其子孫今に傳はる

一 櫛田社は^人王四十六代孝謙天皇の御宇天平寶字元
河内國櫛田社を勸請すと云々天御中主尊十八世の
孫彦久良伊命の御子大若子命なり垂仁天皇越の國
凶賊阿彦といふ者を平らけよとて大若子命に標劍
を賜ふ則幡を擧て輒く退治せよかは其功を賞して
大幡主命と名を給ふ又祇園社の素盞鳴尊なり朱雀
院御宇天慶四年藤原純友誅伐初度の追討使小野好
古朝臣博多に在りて戰ふ神に祈て此所に山城の國

祇園の社を勸請す祭禮に作り山六基あり菊池入道
寂阿元弘三年探題北條英時と戰ひとて百五十騎を
率いて三月十三日此社の前を通る時馬一足も進ま
ず寂阿怒て櫛田社に向て矢二筋まで射たり其後奥
民部丞久吉といふ博多住人行て見るにかの二筋の
矢は獅子狛犬口にくはへてそ有ける太平記には二
^丈はかりの大蛇菊池かかふりにあたりて死すとも
書り九州軍記には右のごとく書て其證あきらかな
り

一 綱敷天神又綱輪天神

社僧の寺成就院といふ

菅神左遷の御時此浦に御船いたりつきて陸にあかり給ふに海人共船のともつなをたぐりてしかせ奉りし所なり即綱敷の御影あり元禄十六年二月朔日の曉此邊火災四邊のこらす焼亡すといへども此社はかり烟の中に在ていさゝかやけす見るとの神威を驚きぬ

一聖福寺禪寺安國山十光國師梁西の開基なり扶桑殿初禪窟の額は後鳥羽院の震翰なり頼朝卿助力の建立なり大檀越にして佛殿に牌を立事實多き故略之寺寺産二百石

一承天寺萬松山開山は聖一圓示國師四條院の御時宋國より謝國明といふ者博多に來り仁治三年此寺を立聖一を第一世とす經山の佛鑑經禪師無準ふん此新寺の事を聞て承天禪寺及諸堂の額諸牌等の大字を書いて送りし事實多し略之寺産百石

一東長密寺真言宗南岳山弘法大師と云大師延暦廿三入唐大同元年冬十月廿二日博多に歸着著し翌四月下旬迄此地に在て此寺を建立す大唐より來る獨鈷及佛舍利一粒を當寺に藏り密教東漸して長く來來際に傳ら人事を勤して東長密寺と号せらる弘法

自作の佛像自筆の画像心經獨鈷佛舍利今傳れり
 寺産二百石此外古神社古寺院不可勝計略之
 一博多富商とも多き中に神屋宗湛嶋井宗室ことに凡
 流の茶人にて京大坂にも往來し名あつものなり宗
 湛天正十四年上京し時の茶の宗匠利休并宗及等に
 會す秀吉公聞しめし御感ありて翌年正月三日大坂
 御城にて御茶被下名物共拜見す同年六月秀吉公薩
 摩征伐の爲下り給ひ御歸路幸符御參詣夫より箱崎
 御宿陳の間博多の町割を極給ふ奉行は瀧川三郎兵
 衛長束大藏山崎志摩小西攝津下奉行三十人此時宗

湛宗室には十三間半宛屋宅の地被下永代丁役を
 除今に至りて免除す其後文禄元年朝鮮陣の時秀吉公又
 九州に下り給ふ十月晦日朝宗湛宅に被為成御茶を
 獻此家に今あり御相伴織田有樂一人御給仕小寺休夢一
 人なり御茶の時休夢如水叔父被召出となり宗湛宗室
 の家今は衰微ぬれとも猶其家相續せり其後の富
 商の中に大賀宗九といふ者の家息秀て其子孫相續
 り兩家と成ていつれも家居つれしく國主も度々
 來遊し給ひ巡國の上使長崎の御奉行或は松浦大
 村唐津等の領主參勤の往來此兩大賀が亭にて饗應

1442

國會し給ふ事あり一家は代々俗名善兵衛といふい
ま善兵衛祖父法體して宗恩といふ其嗣父善兵衛法
體して如心といふ宗恩如心ともに点茶を好み國主
にも茶を献す珍器ともあまた所持せる中に若草久
琳といふ名ある茶入をも如心求て所持し國主も稱
美し給ふ今一家は代々俗名總右衛門是又点茶をこ
のみ珍器共多く所持す兩大賀ともに光之の時より
五十人扶持宛賜ふ

一朝鮮歸陣の時石田治部少輔は博多に居す諸大名歸
朝して淺野石田にはかたにて對面せしとなり

1443
一博多南北の中程に古は東西に通れる入海有て袖の
湊と号すこれ唐船の入一湊なり入海より北を澳の
濱といふ今は入海はなくなり其跡のみわつかに残
りて横一間ばかりなる溝東西に通せり今片原所に
小橋あり湊橋とも冷泉橋とも云則此溝袖の湊の名
残なり澳の濱の北の海つらには石壘長くつらなり
東は宮崎たゝらに至り西は今津に及べりこれ上古
より聖賊の防ぎのために築しと云々
つくしよりのほらくとてはかたにまかりけるに
館のきくのたもしろく侍りけるを見て

後指遺 取あきて我身に露や置ぬらん

花よりさきに先そうつろふ

大貳高遠

夫木 船出せしはかたはいつこ對馬には

しらぬ新羅の山そみけけり

國基

堀後 うなはらや博多の沖にかゝりたる

兼呂

堀河百首 唐人は志賀の小嶋に船出して

はかたの沖に時どくすなめ

1444

拾遺

めつりーや是やはかたの唐の人

俊頼

名にも詞もありぬ事かな 慈鎮

我こひははかたを出る唐ふねの

ゆたのたゆたひ追風そまつ

隆源

博多掛所筋より濱邊の方を沖の濱といひ濱口町

菅家

の海濱を北濱といふ 北濱の西にあるさへたかききに

なきさにちかき沖の濱かな

文明十三年九月廿八日博多龍宮寺にて

秋更ぬ松のはかたの沖つ風 宗祇

袖の湊

續後撰 かけなれてやとる月かな人しれと

夜なくさはく袖の湊に

續古今

千鳥がく

つる

式子内親王

續古今 千鳥がく袖のみなとをとひこか

もろこしふねの夜のねさめに

つる

定家

石堂

一昔唐船博多入津の時石を多く持渡り今石堂橋の邊

に石を以て堂を建佛像をも彫て安置す後年續破

て名のみ残れり堂に用たる唐石今寺院市中等にも

のこれり

濡衣

一聖武天皇の御時佐野の近世といふ人筑前の守にて

下りしに京より具したる妻國にて死けりさて其國

にある女を妻としけり先の妻の生るむすめを継

母にくみていかにもして此むすめをうしなはくと

思ひ海人をかぢらひて云此曉來りていふべきやう

1445

は京の姫君の此ほど夜な〜我もと〜ましましつ
 るかつり衣をぬすみてたはしつるた〜といへとて
 色々の寶をとりせける海人曉曉來りてかねてたのみ
 ーごとくこはたかに云ければ父是を聞て大にか
 り行てみればむすめぬれたるきぬを引かつきてね
 たり是はむすめのね入たる時に継母のきせたるな
 りけり父其たはかれる事をしらてたちまち娘をこ
 ろしけるさて次の年むすめの父の夢に見えて二首の
 歌を詠しける父夢覺てむすめの罪なき事をさとり
 さては継母のーはさなりとて妻をたくりかへー其

しな
ら

身は出家して松浦山に住けり世に松浦上人とそい
 ひけるそれよりしてなき名たひたるをはぬれきぬ
 きると云傳へ歌にしよみ侍る其むすめの墓むかし
 は聖橋福寺の西川のかたはりに在ーを近きせようう
 つして今は箱崎松原の西の橋際博多の東石堂口の
 川の邊邊なる小池のうちにおり石をしるしとせり父
 の夢にむすめのみし歌二首
 ぬき、する其たはかりのぬれ衣は
 ほかきなきき名のためしなりけり
 濡衣の袖よりつたふ涙こそ

なき名をなかすためなりけれ

右の二首夢に見し歌なり

古今八離別
かきくらしことはふらなる青雨に

ぬれ衣きて君をとめ人 讀人不知

花のもとにてほともなくちることなと申け

るつゐてに

後撰
春くれは咲てふ事をぬれ衣に

貫之

きするはかりの花にそ有ける

なき名立けた頃

讀人不知

同十七
よとともにも我濡衣となるものは

わふり涙のきするなりけり

崇福寺

讀人不知

一四條院仁治二年に僧湛惠太宰府横岳に建立す其翌

年聖一國師大宋より歸朝博多に著湛慧これを

請して閑堂說法せしむ聖一の佛師聖一の佛師聖一禪師高準和

勅使方年崇福禪寺の扁額を書して聖一に與ふ聖一

持來て此寺にかく則寺号とす每元亭名之山号は横

岳山嵯峨院寛元元年兼天寺と同時官寺と成り西都

法窟の勅額を賜ふ其後圓爾東福寺に住持の時湛慧

より南浦明禪師大應を請して開山とす南浦は經山

1447

353-369

352

國書刊行館
虚堂法師詞なり大應此寺に居住三十三年なり京萬方壽
寺に移了に及て弟子即山和尚此寺の二世なり天文
十四七月薩軍岩屋城を攻し時兵火にて此寺も焼失
什物皆烏有となす長政被入國大徳寺春屋此寺再興
の事を願はる長政もとより春屋國師に歸依一參得
一給ふ故許容ありて博多東十里松間にうつし菩提
所と一給ふ雲英和尚江月和尚江雲和尚質休和尚古
外靈兼今天庵に至て相續て住持せらる寺産三百石
宰附如水居士道卜居士の塔所にて國主の菩提寺な
り

糟屋郡

日本紀継體天皇記筑紫の君葛子恐坐獻父誅獻粕屋
屯倉求贖死罪とあり

表粕屋

箱崎

舊記不可勝計記に不及戒定惠の箱たさめられし
より箱崎といふよし印の松前箱にあり

一八幡宮創立の始は兩三説あり天平寶字三年といふ
此説相かなへるか其先當國穂波郡大分たぶん八幡宮にて
まし宰けり宰に太貳少貳真村朝臣に神説ありてこ

、にあかめ奉了事舊記録記等くわし異國より我國
をうかぶ事ありは我其敵を防去べし脚社の柱の
礎に敵國降伏の字を書て敷へしと神託ありしかば
延喜帝宸筆を以てししてしかせ給ふ此文字 紺紙
金泥
に今傳れり度々炎上造營等事多故不記之

一秀吉公天正十五年此脚社の境内に脚宿陣は六月七
日より二十餘日脚留^留なり其内日々茶會有

六月八日 利休亭にて脚茶を獻す

同十三日朝 宗及脚茶を獻す

同十四日 箱崎燈籠堂にて利休脚茶を獻す

同十八日 箱崎松原海邊^邊の南夷堂の東北に

て松にくさりをかけ雲龍の小釜
をつり松葉をたきて脚茶を獻す
此處の松今に六七本残れり金か
けし松もあり此所にしるしの石
を建たり此所にて和歌あり

秀吉公

あつき日にこの木のもとに立よれば

波の音する松風をふく

千とせをとれーみ入をく箱崎の

松にはなかく折にあは、や

此短尺に今あり人々の歌共略之外短尺七枚あり

同十九日朝 秀吉公御陣所にて神屋宗湛嶋井

宗室に御茶被下

同廿五日 赤幡坊にて宗湛所茶を献す

同廿六日 宗及又御茶を獻す

一箱松の事社僧家の説には戒定惠の三学の箱を埋れし其しるにうえ給ふと云々一説に神功皇后宇瀨にて應神帝をうみ給ふ時胞衣を箱に入れて埋給ひしるに松をうへ給ふと云々

一座主坊は大具山五智輪院彌勒寺といふ社領五百八

石餘

一箱崎崎の鳥居に行道に一字の堂あり往昔龍燈上り

し所といふ依之燈爐堂といふ觀音堂なり

一八幡宮南の側の密院を赤幡坊と云後醍醐天皇旨

なとありに寛文の初赤幡坊一字火災にて寶物と

もに焼失す

一唐船にたふ箱崎殿といふは留主殿といひて八幡宮

の神職の内にて今はかすかなる體なり素官人箱

崎住宅の事不分明素卿は勤人なり來朝の初不知永

正六年源義隆將軍素卿をして大明國に遣す素卿得
飛魚眼歸朝す又大永三年義晴將軍の時管領細川高
國大明國人高船を遣す此時も使者素卿たよし王
代一覽將軍の家譜に見たり

拾遺六

幾世にかかたり傳へ箱崎の

源重之

松のちとせのひとつならねは

源重光

後撰九

そのかみの人はのこらし箱崎の

中將尼

松はかりこそ我をしるらめ

續古今

千早振神代たうし箱崎の

法印行清

松はひさしきしるしなりけり

法印行清

新千載

右筑前國箱崎の宮のしるしの松をよめるとなく
あすれすよにつくりにたちかへり

ふたゝひみいで箱崎の松 賴氏

前中納言匡房二度師そつに成たるよろこび申つかは

すとして

凡雅

かくしあらは千とせの教もそひぬらん

康賢

ニたひみつる箱崎のまう

康資五母

按摩使顯朝

新拾遺 跡たれて幾世ぬらく箱崎の

しるしのまつと神さひにけり

按摩使顯朝

ワタル

地藏松原

一 小松重盛公菩提のため育王山に砂金をわたし給ふ
其歸船に色々の物をつみ來りし時此地藏もから國
の製作にてわたしけるを此所に安置していますに

たれり宗像郡田鶴島の一切經等の類ひなり今の地藏
堂は忠之の時建立なり

た、良濱

箱崎名嶋の間の遠干瀉を云名所にあり

一 尊氏菊池合戦此所なり又永祿の比大友宗隣毛利元
就多々良合戦此所なり

一 大内義隆の先祖琳聖太子此た、ら濱より上り給ふ
と西國太平記に有はあやまりなり周防のた、ら濱
なり方角後に記す

いにしへはこゝにゐるもの跡とめて

遊齋

1452

今もふみみすたぐり濱かな **幽齋**

皆打濱

皆打嶺

一松崎の東南なり松崎より濱男に越るみねを皆打の嶺といふ皇后三韓よりかへらせ給ふ時姪濱柏の濱よりあかり給ひ御船は名嶋につきぬ御留主にありし人々来りむかへて新羅の合戦の事を尋しに異賊をば皆打ぬとこたへられしより皆打濱といふ皆打の嶺も同一

名嶋

往昔は黒津浦と云皇^后居三韓より御歸朝の時諸神御名を改られ夫より名嶋と云傳るよし

一此所は小早川隆景居城其前立花但馬守鑑載^かが城なり慶長年中に此城を引崩す

一朝鮮凱旋の時淺野彈正は名嶋に居す

一此所に辨財天はしますなり

一帆柱石は神功皇后三韓よりかへらせ給ひ御船此所につなぎ帆柱こゝに捨給ふと云々其帆柱石と成て今にあり年を経て段々たれたりといへとも其形あさやかにして柱の本末金物のかたちなと猶のこれ

り

賀思布江

奈田濱の内濟慶崎の入江とも云不分明又香椎の内ちりとも云

一奈田の濟度崎の成多三町ほと沖に瀬あり塩屋といふ志賀の海士の和布刈塩焼なと讀たるは此所と云往昔は材木も有たよよし今は波に崩れて跡形もなしされとも古木の樹岩となり塩屋瀬の中ちにあり潮干に見ゆる

一志賀大岳の前の小嶋を葉嶋といふ今は是を虎嶋と

いふ大竹山に附てとらといふ秀分ののよしいり

一志賀の嶋海の中道の間續て嶋にありすされとも風波により大竹山竹と志賀の間きれて大船も事あり

此時はかならず諸國飢饉するなり

かしふえに田鶴なきわたさしかの浦に

たきつしら波立しくらしも

志賀嶋

一志賀社延喜式神名帳に粕屋郡志加海神社三座とあり今は那珂郡に属す那多濱よりつゞきて粕屋たゞべき所なるにいつの比より那珂郡に属せしにや此

1454

御神も住吉と同時橿原にて他生の神にして底津少
 童命ちみ中津少童命表津少童命の三神なり底津少童は
 今の志加本社也中殿底津少童命右殿神功皇后左殿
 勝馬馬明神なり中津少童は志賀嶋の西北勝馬といふ
 所の濱中津明神と云社あり是や表津少童命は中津
 明神社より北一町半許に勝馬明神の社有これなり
 此三神は阿曇連等あつむらひかいつきまつる神なりと日本紀
 神代卷に記り又舊事記にも阿曇連等齋いひき祠やしろ筑紫
 斯香神しか也とかけり阿曇又安曇とかけり古綿津見神
 之子宇都志つしび曰金拆命かぢのみことの子孫也と記せり姓氏録には

おま

阿曇連は海神綿積豊玉彦神の子穗高見命の後也と
 あり今志加神官の者も皆阿曇氏といふ神后新羅を
 うち給ふ時此三神御船の柁を守り給ふさるに依て
 御凱旋の後阿曇連をして鎮め祭り給ふと云々
 一社家船師の説に此嶋船掛する濱より先のはなを磯
 良崎といふ三韓御退治の時吹上の濱にて神樂を奏
 し志賀明神をまねかせ給ひしに亀に乗て此所より
 出現し給へは磯良崎と名付るよし其時の亀石と成
 たるとて今明神の前にあり亀石の形あさやかなり
 志賀明神は安曇磯良丸と申奉り海底に住給ふ御神

のよし神徳不可勝計恐れあれば不能記日本の船に丸といふ字を付し事磯良丸の一字をかたとり夫より云傳ふよし當秋の縁起にあり又丸といふ事は人数をまるめて入置を丸と云城を本丸ニの丸なりといふかことしされば船も人数をまるめて入置は一城に^海して何丸か丸といふさもあるべし然共我つらの船客はたゞ明神の縁起をたつとふなりと云々

社家の説に志賀明神を阿曇磯良丸と号し海中に久しく住て組螺石花及諸藻蟲など顔にも身にもまとひて有しを神功^{神樂}聖右を奏して招き給ふ覆面

かまじ

を^たれて出給ふといふ事太平記に^し又箱崎八幡の縁起等にもあり右日本紀等の説を考ればいふかき事なりされども又此説もひたすらに捨へからす神靈の化現^凡元慮のはかまべからざる事多し皇后の招きに依てみかたちを現し我はこれ阿曇磯良丸なりとのたまひ三韓征伐のために冥助ありけりな^るべし

一釋日本紀に筑前風土記を引て皇后新羅に幸し給ふ時脚船夜來て粕屋郡資珂嶋に泊り給ふ大濱小濱をつかはして火を求め給ふ小濱かことばに此嶋は打

昇濱那多濱な 近く相連り殆同地といふべしこれに
依て近嶋ちかしまといへり

一むかしは末社三百七十五區あり乱世頽破し永享十
一年大内持世再興百二十社建其後又兵乱にかゝり
わつかに今五社残れり長政の時本社改造らる

一社僧坊は金剛山吉祥寺禪宗にて承天寺末寺なり聖

一國師始天台宗の時此地に來り法を説れしに社人
等師の弟子故依し時の別當坂本知家か男子を國師の弟子師の弟子と
し官司坊宗岳と号す此由緒にて後聖一禪宗となら
れても禪宗と成て于今至れり社領五十石

一文珠堂社の西の側にありいに一へ經山寺より文珠
の木像及びひ五臺山の繪圖を此嶋に渡し堂を作て安
置す又大藏經をも渡しけるか文禄二年十一月四日
火災文珠の像半焼しを重て造りつきてあり藏經焼
残りて二千餘卷あり此文珠の事東海瓊玉集に載れ
り

一志賀大明神座山を勝山といふ三韓に附勝給ひて
祝し給ふ名なり勝山より西の方の山を三笠山衣笠
山といふ神功皇后御歸朝の時志賀春日鹿嶋三社と
仰かすつきとの勅にまかせしかのしまに二山をう

つされしとなり

三笠山さしてやかよふしかの嶋

幽齋

神のちかひのやたてなれば

元 幽齋

一志賀明神に参る橋を龍天の橋と云むかし此谷川より龍天上したり依之名付るよし

一樓門の前の小橋を育民の橋といふ往昔諸國旱魃にて田畠不残やけかれんとす筑紫の諸民志賀明神に雨を祈る俄大雨降て三日小止となりし此所山上なりしかと山水出て小川流るゝ夫より橋をわけて民を

はこくみ給ふしとしとていくみの橋と云傳るよし

一明神の御座勝山の谷の竹は三韓市退治の時の脚旗竿なり市歸朝の時此谷にさし給ふは翌年の夏竿生して竹林と成る夫より武士及舟人は是を拜受して印竿とす長生竹と云

一磯良崎の白濱をかなの濱といふ諸神市歸朝の時此濱に至りて諸願叶へりとのたまふ夫より叶濱といひ傳るよし

一叶濱の先のはなを首切といふ諸神三韓へ市發船の刻塵倫鬼化生して冠をなす明神則時に退治有て此

所にしるしを埋給ふより名附るよし
万葉集三
しかのあまはめかり塩やきいとまなみ
つけのをくしをとりの見なくに
石川少郎子

万葉集作
石川少郎子

同四
万葉集に云石川朝臣君子号曰少郎子
伴大宰大監代

たぐひてそしし志賀の濱邊を

同七
志賀のあまの塩やくけふり風をいたみ
伴大宰大監代
作者不知

たちはのほりて山にたなひく

同七
千はやふるかねのみさきを過れとも
作者不知

同十六
しかの山いたくなきありをうか
我はわすれす志賀のすめ神

山上憶良

よすかの山と見つゝ歌はく

山上憶良

同十五
仙覺抄云よすかとはかた見なり
しかのうらにいきりす了蚕あけくれは

うらま漕らしかちをとの聞ゆ

堀川後百首
から人のしかのせしまに船出して
俊頼

俊頼

博多の沖にときつくるなり

つた 復頼

一志賀嶋の浦より南に當て早良郡背振山見ゆる國中
の高山なり金龍山と号すと傳通記に見たり又白
宇津山といふよし書寫山御廟講私記に出たり山
上より四方をのぞむに秋の比晴明なる時は朝鮮國
見ゆ春の比もくもりさる日は壹岐對馬まで能見ゆ
對馬は是より百里あり山より北は筑前まのあたり
にみゆ南は肥前筑後眼下にあり豊前の彦山當國竈
門山古所山など皆高しといへども此上より見れば

1460
猶眼下にあり山上に辨財天堂一字ありいにいは
背振山東門寺とて僧坊三區百在しとか今は一坊の
のこりす其故は背振山の僧徒と西油山天福寺の僧
徒争論の事ありて西油山にたよせて放火しける
其仇を報せんとて又東門寺にたよせて悉く焼亡
す其後九州乱世の時ゆる東門寺も天福寺も再興の
沙汰に不及共に廢亡の地となれり性空上人日向の
霧嶋より筑前背振山にうつり住居し其後播州書寫
山にうつり給ふ事朝野群載第二卷花山法皇の書給
ふ性空上人傳にあり又三代實錄元亨釋書にも同し

く出又花山法皇書写山に登り給ひ一時巨勢廣貴に
上人の影像を写させ具平親王に其替を作らせ行成
大納言に書しめ給ひにも霧嶋より筑前背振にう
つり其後書写山に任せしよし見たり其外那珂郡
早良郡等にある古き文書どもにも皆筑前早良郡背
振山と記せるもの不可勝計後代肥前國神前郡に此
辨財天を勸請して中宮下宮と稱し其中宮を靈山寺
といふこゝにも辨財天堂あり下宮には辨財天堂な
し中宮下宮ある故に上宮と肥前國には稱すとす
り古は本宮一所なる故に上宮の名なし肥前に中宮を

立し故其勸請の地をもしめて名つけて背振山と肥
前國にてはとなへ來れりとかや背振山の筑前たこ
事は右に記す古書共三代實祿朝野群載元亨釋事に
あるひは勅書國史博識尊貴の作にして聊うたかひ
なし只溪嵐拾葉集と檜垣の姫の集にのみ肥前と
るせり溪嵐拾葉集桑門の作檜垣姫は遊女のかな書
の書なりかの勅書國史等の正書にたぐらふべから
す然共故有て元祿六年十月十二日より肥前國佐賀
領に属す

廣浦

かづきの海士住す

一神功皇后吹上の濱にして西の方を詠給ひて狹隘の
うれへなしと宣ふ夫より志賀濱を廣浦ひろのきいひたる
よし此後此所に人家立により廣浦と名付了よし
かつきの蛭住むしゆあま浦といくり此所に靈佛れいぶつの不
動あり此不動は弘法大師大唐にて一刀三禮さんらいの作な
り歸朝の時此所醫王院といふ寺に安置し給ひ夫よ
り紀州高野山を開かれし時此不動の尊像を高野山
に移し奉り今高野の南院の生不動とあかむとかや
御崎みさき

一此所は志賀の市藤本として甲瀨烏帽子瀨かふとせなといふ

1462

瀨多して海路第一の難所なり甲瀨名ほし瀨といふ
は三韓より御歸朝の時此瀨に甲烏帽子を納め給ひ
龍神を祭らせ給ひければ名付了よし

一御藤本の白濱を下馬か濱といふ右御歸朝の時此所
より御馬をわろさせ給へば名付了よし

一御崎より東の瀨の内を御手洗といふ諸神御みかみ給
ふ所といふ

一勝馬村として市崎の地に人家あり下馬か濱よりわろ
させ給ふ神馬此所にはなち給ふ夫より勝馬と名付
つよし志賀明神の市岳跡勝山に同じ事なり

一 大浦田沼たぬといふ名所志賀邊邊に有と歌枕にもあり名所たぬにあらす人の名なり

一 志賀明神の北浦に十郎瀬虎に瀬なといふ高瀬あり此磯を大磯といふに依ての秀句にや

一 志賀の神殿に奉納の鹿の角積重一事其数をしらす是を諸人神納す事は三韓所退治の時糧つきて軍士飢に及ぶ事ありしに山を狩して鹿をころし飢を

助給ふにより此恩を報じ給はんとの御誓にて鹿の角までも憐愍し給ふとなり故に信心の輩是を神納す然るに鹿をころしても角を神納す者あり大き

にあやまりなり依之志賀の敷地の者鹿を食事なりす若不知して食すれば忽に肌はれて身をなやむ事眼前なり知て食すれば一日を過さず死す誠に船人

三つ

ことにつゝむへし

海中道

志賀神詠と云々
波あらしき塩干の松のかつらかた

嶋よりつゝく海の中道

夫木
船ならて右や左の波きけは

潮のみちひの海の中道

1463

名に―あふれたつの都の跡留て

波を分行うみの中道

幽齋

筑紫記行
波風をたさめて海のなかはまて

みちある國や又も来てみん

宗祇

一海の中道の事筑前名寄等にも宗像郡桂村と梅津の

間の事なるべし一説に此志賀嶋と那太の白砂山を

いふといへども歌心になはす

秋の夜のしほひの月のかつらかた

山までつゝく海の中道

1464

と九條内大臣の詠を見れば山までつゝくといひか

たしとして宗像の方より所あるべきよし記せれと

志賀にも勝浦といふ所あり只今干潟なしとて古の

事を論じかた―古地の變易菜田海濱となるためし多

―宗像の梅津とかつら村の間はやうやく十町はか

りの所なり那太の白砂は三里つゞきたる白洲世に

たくひなき景地にして唐土の書にも白砂土と稱し

て繪にもうつせし所也山につゞくとよめし景氣

そことに歌のさまもゆほひなれ荒神津の崎よりも又

は志賀嶋の内外より見ても此白洲東のかた香椎立

國書刊行會

花のいたゝきにつゝきて見わたされたる佳景繪に
かくとも筆に及ふべからず歌人の詠眺望のあり
さまを詠するもの皆かくのごとく何ぞ天地のつゝ
きつぬを論ずるにたらむや

裏柏屋

香椎

海邊より五丁程山の方に宮居有

一此宮は神功皇后をまつり奉るなり敵國降伏の靈神
代々の帝天照太神につゝきては此神を崇敬し給ふ
事共古記不可勝計略之九州乱世の時衰微に及べり

天和の年光之又新に神田を寄附し給ひ濱の鳥居を
建らる

一神木の杉をあや杉といふよのつねの杉に異なり老
樹雲をさゝふるがごとく兵乱の時度々やけしかと
も灰の中よりたちまち若木生出てほとなく大木と
なれりと云

一香椎の前海邊の人家を濱男と云濱男大明神御座海
神なり皇^后此濱にて天神地祇を祈り給ふ時神樂を
奏し給へば神樂男と現し給ふ故に濱男と名付はよ

一濱男の海邊邊を香椎香椎深香椎の渡りなといふ此所也
 一濱男の東北一町餘大道の側に冑塚冑塚といふあり皇后
 新羅に軍立し給ふ時こゝにて始て所かふとをめさ
 れたる所のよし鎧塚は爰より新宮のみなとへ行道
 なり皇后のよろひを召されし所なり冑塚も濱男の
 東二町許にあり異敵の切耳を納給ひし所となり此
 塚のある田地を京田といへり粕屋の郡原田前田な
 とみな舊記にしるせる所なり
 一所嶋といふ岩海中にあり濱男の乾の方八九丁岩嶋
 なりむかしは其上に所嶋大明神社あり後代石をと

りし故崩れて今は社もなく石もすくなくして汐満
 たり時わつかに見ゆるのみなり日本紀皇后記に
 皇后檀日浦かじのうらに詣て髪をとき海にのぞみてのたまは
 く吾神祇神の教をうけ皇祖皇祖の靈霊をかうぶりてみつか
 り西を征せんと欲すこゝを以て今かうべを海水に
 そゝく若駿あらは髪たのつからわかれて西となれ
 とて即海に入てすゝき給ふ所ぐし自わかれぬすな
 新古新古あち鬘と給ふと云々則此所嶋にての事なり
 千早振香椎のみやのあや杉は
 神のみそきにたてりなりけり
 讀人不知

續古今

沖津風さむく吹らし香椎沼

讀人不知

しほひの千鳥夜半になくなり

為家

同

船出す木きつ塩さひ白妙の

香椎のあたり波たかくみゆ

家持

フ
+
ル

安部嶋

あ江嶋とも言ふ今藍の嶋となふ

一一説に安部嶋は大嶋をいふ安部宗任大嶋になかさ

れし仔細大嶋の下にしたるす依之大嶋を安部の嶋と

もいふと云々さもあるべき説なれとも其先日本紀

第九卷に筑前國安部嶋の海人の事みたりしかれ

は安部嶋は宗任以前より名あり藍の嶋安部の嶋を

あやまりとなへ來るなるべし

一韓使來朝の時ことに國主より此所にをみて饗接あ

り其備はなほた盛美をきはむ

1967

方葉

玉勝間あへ嶋山のゆふつゆに

作者不詳

旅ねは忍すやなかき此夜を

續古

あへしまの山の岩かねかたき

作者不詳

さぬる今夜の月のさやけさ

名歌

都柿もふ袖もかたきほしあへぬ

通果

あへしま山はつゆふかく

通果

夫木

香椎瀉夕きりかくれこきくれば

小侍候

あへのしまわにちとりしはなく

小侍従

一同所東のはなに泪嶋あり中うかち通りて牛のはな

ぐりに似たり依之俗にはなぐり嶋と言しかれば筑

前名所角嶋追戸方角不知もくは此所なるべきに

や萬

津の嶋のせ戸のわかめは人のとも

あれたりしかと我とば

一泪嶋のありさま奇異の所なり方なる程を重ねなら

べたさ如き岩高く海の上十間餘めぐり六十間許洞

中高さ五間許横二間許舟にのりて通行す阿南の

1468

圖書刊行會

室語

嶋の東の海濱に、岩窟あり、其中に舟を入る、舩の入
 所四五間許、其先は窟の内うつくしき岩を敷る地な
 り、是又奇異の地なり、右に記す、芥屋の大門に相似た
 一相嶋より巳午に當て御笠郡、竈門山表、粕屋郡若杉山
 裏、粕屋郡立花山見ゆる、いつれも古城山也
 一竈門山は當國の中央に在て、國土を鎮め守り給ふ神
 社なり、玉依姫をまつる所なり、石川のかまとのこと
 きあり、益影の井とて名水あり、依之山の名とすと云
 々、應神帝宇瀨の宮にて所誕生の時も、此水を汲て、市
 うふ湯と給ふと云々、天武天皇市宇心蓮上人始而

1469

此山に佛堂を建寶中寺と号す、法相宗なり、佛頂山東
 尾寺宰府の方有知山寺も一山なり、三百七十坊と云
 々、文武天皇御宇、役行者登山して七の岩屋を開か了
 皆神靈の窟宅する所也、仁明文徳、清和、陽成代々の帝
 勅使奉幣使を下し給ふ事、國史に多く見たり、傳教
 大師弘法大師いつれも此山にのほり行ひ給ふ跡あり
 神領五十石

一此山古城なり、元は原田の氏族高橋光種筑後國高橋
 に居城して高橋氏と稱す、其後大友家に屬す、三河守
 長種死して嗣なし、家臣とも大友にこひ申ければ大

國書刊行會

國書刊行會

友義鑑の計ひにて其一族一まは田左京大夫親敦ちかあつの二男右馬助を以て高橋家をつかめ三河守鑑種と名乗らせ高橋に居城す鑑種寶満の要言を見立て高橋門山の城を築てうつる岩屋を以て邑城とす義鑑の子義鎮つとむ隣かたに宗に對し鑑種恨をふくむ事出來て永禄十年毛利家に心を通す大友より臼杵鑑連かたむす吉弘鑑理を大将としてさしむけらる即時に臼杵か一手にて岩屋を責落し寶満を遠巻して月日を送る鑑種終に没落し城を明わたす其後吉弘左近大夫鑑理の二男彌七郎鎮理を高橋主膳兵衛鎮種と改て寶満岩屋兩城

國書刊行會

の主とし守らせらる是則法躰して紹運なり其後大友家衰微に及びしかと紹運と立花の道雪兩人二心なく大友にいたかひ紹運は天正十四年七月薩摩勢と戦て小勢の籠城大軍に敵しかたく同七月二十七日岩屋の城に於て自害せらる此時兩城共放火して再興一なり高橋所あり都より西に有てふかまと山

同 けふり絶せぬ懲もするかな
世の中をなけくなくゆるかまと山 人凡
晴ぬ思ひを何にそむらん 人凡

國書刊行會

現六

散たひにも ^ぬこかれてもたしきかな

かまと山なるひ櫻のはな

道信法師

名寄

かまと山また夜をこめて降つもる

^峯の白雪明てこそみぬ

匡房

万長歌

降雪のとけくこもなくつもりつり

かまとの山の山守はし

行衛もみえぬみこりのつま木 ^にりたが

朝夕のふけりのみこそ立にけれ

つくし ^しまかりける時にかまと山のもとに宿り

拾遺 ^て待けるに道つりの木にふるし書附て侍り

又書附けり ^春はもえ秋はこころ ^しかまと山

かずみもきりも烟とそ見 ^るえ輔

筑前のかみにて國に侍りけるに日のいたくてり

ければ雨の祈にかまと山の神に鏡を奉るとて

えたり

新續古今 ^雨ふれといのるしのみえたらは

水鏡ともたもふ ^しきかな

藤原經衡

一若杉山は山上木祖 ^権推現の社あり神功皇后三韓にた

1497

國書刊行會

しむき給ふ時此所神にも所祈あり御凱旋ののちその報賽に香椎の杉を~~分~~て此上にうえさせ給ふ綾杉谷といふ所今にあり故に分杉と書り今訛て若杉と書なり香椎より分ちうえたる若木なれば若の字も亦可用此山の古城は高尊居といふ分杉山の半腹なり周防の大内氏の臣杉~~豊~~後守興行取立て居住一同重並連並等相續てかけ持にせり後秋月より攻とす天正十四年岩屋没落の後筑後住人星野中務少輔は父子を立花のむさへとして籠置けり立花左近將監宗茂有時に攻落し星野を討取此時城郭も放火し

て焼亡す

一立花山 伊弉諾尊たちにはな~~の~~の小戸のあぢきか原にてみそきはらひ給ふとある立花則此山なるよし宗砌法師か抄に記せり海上よりの眺望も世のつねの山にありす山のすかたのびらかに翠をたゝめり麓に傳教大師入唐歸朝の時ばじめて開基し給ふ獨鈷寺の古跡薬師堂あり傳教大唐より歸朝ありんとて此獨鈷と壇鏡とを日本へ向てなけわたし給ひ此山に飛落たり其地に伽藍を建立し給ふと云々獨鈷壇鏡に今傳て有

1472

一此山も古城なり大友元祖左近將監能直より六代の
後胤大友左近將監負載始而此山城を築より七代
立花但馬守鑑載に至るまで在城す永禄八年鑑載故
有て大友に叛けければ大友より戸次丹後守鑑連道
道を討手として被指越攻戦ふ鑑載打まけて落城し
自殺す鑑連と其祖は同く大友能直より出たれば
鑑連を立花の城主として筑前の守護職たり道雪男
子なきゆへ高橋紹運の長男千熊丸をこひ養て嗣子
とせらるこれ左近將監宗茂也初統虎後法名立齋なり道雪は
天正十三年九月十一日筑後高良山の麓小野村陣中

にて病死せり此山の養孝院梅岳寺に葬り其院に
今あり石塔もあり翌年七月廿七日岩屋落城紹運自
殺の後薩摩秋月の勢直に立花にたよせ廿日に及
ひ是をかこむといふと固く守て落城せず薩摩勢
引退くに及て宗茂筑後川まで追討し其上高取居城
を即時に攻落し星野中務少輔を討取す秀吉公宗茂
の事を甚賞し給ひて九州の一物なりと黒田如水へ
の御書に被仰越たるも此時の働なり此後宗茂は柳
川にうつられ筑前國は小早川隆景に賜り名嶋の城
を築て居住し立花には家臣浦部宗勝を入置り慶

1473

國書刊行會

長五年長政の入國以後立花の城は破くつさる

宗像郡

日本紀に胸肩と書古事紀には宗形と書筑前凡土記には宗像と書り其心相同なり事長き故略之

葦生浦

福間と新宮の間の浦を云宗祇宗祇が指南抄に新宮と云所より北と有順和名抄に宗像郡葦生の門ありと云々今西郷村に葦生と云枝村あり昔は此邊海邊をすべてみ海の浦といひけるにや

後拾遺

うかりける身のふの浦のうつせ貝

懐中

身のふ濱なにかは波のよるをまつ

むなしき名のみ立は聞きや 馬内侍

ひるころ貝の色も見えけれ

櫻貝身のうき濱に寄にこそ

筑紫紀行

けふそしる此うら波のうつせ貝

我れもひのみ色まさりけれ

身のうしとてやかくもなるらん

宗祇

ツナル

國書刊行會

1974

津屋崎

一入湊なり船掛する所を渡り村といふ湊口の高山を
楯崎山といふ神功皇后三韓御退治の時楯の板此山
より出たりと云又は御歸朝の時此所に治られしと
もいふ依之名附るよし楯崎の薬師として靈現あらた
なる薬師木はします是により薬師岳ともいふ
一渡村を打越て北の濱邊に戀の浦と云所あり五色の
蔞石多き所なり

一渡村より一里東南宮地岳とて古城山あり宗像の家
臣小楯對馬守秀盛居城

1475

一渡村北沖のはなの小嶋を鼓石といふ小島のいた、
きに五尺に八尺ほとの大石ありつゝみに似たりと
て名附るよし寛文のはじめ堺のもの夢想に得て盗
取たるよし今は鼓石なしいふかき事なり

有千瀉

津屋崎の東宮地村の近所也俗に荒あらい自村と云瀉は
かつらかたに續く
ありちかた有なくさめてゆかめとも
家なるいもやいふかしみせん

ワタル

名兒山

荒自より田嶋越る山なりいにへの海道なり名

萬所なり

長歌 わほなむち すくなひこなの 神らそは

なつけそめけめ 名にのみを 名兒山といひて

わか戀の ちぬのひとへも なくさまなくに

つみん

勝浦

一かつら岳と云は津屋崎より二里東の山なり宮地岳

對馬見山かつら岳と三つならふ神功皇后此に上り

しんらぶ

給ひ勝浦と宣ふより名付るよし瀉は津屋崎内より
みゆる塩濱なり

つみん

勝嶋

一安部宗任か孫安倍義宗といふもの山鹿兵藤次秀遠

と合戦の時此嶋を便として義宗うち勝ければ勝嶋
と名付るよし大嶋にて云傳了

一勝嶋には宗像氏貞の端城ありしよし

つみん

神湊

1476

一かうの湊の山を四つ塚といふ此はなを草崎と云古
城山也宗像十六代氏俊の家臣占部甲斐守家光掛持
なり甲斐守は鐘崎の上八村に居住したるよし同壺
岐守同右馬助同九郎右衛門代々掛持也

ツル

江口

一江口川の十町程上を五月濱といふ宗像第一宮の記
録に第一宮は正一位也推古十三年六月朔日東洞院
但馬前司隆房太政大臣正一位奉~~勅~~五月濱にて祭之
と有之

一宗像記に曰五月五日宗像家人家々の嫡子花やかに
出立て五月濱に出て馬をのる是を五月兒といふ家
をつぐ嫡子なけれは庶子此日かけ馬をのりて越度
なくのり仕廻へは宗領の座に直りこれ古來の風俗
也と云々

ツル

宗像山

赤間驛の上蘿が岳を云
一赤間は赤馬正宗なり神武帝日向より東征し岡の湊
に來り給ふ時一神ありて赤馬に乗來り此里民に下

知せりこれにより赤馬といふと云々

一蘿か岳古城は人宮司六十五代氏俊住す氏貞は初當

國に下りし時くたいし孔大寺の白山の城に十二年居住し永

禄五年白山を去て此城にうつる葛か嶽の名を改て

嶽山といふ田嶋祭礼の時は本社のうしろ脚内とい

ふ宅に留り神事をつとむ

一田嶋宮は宗像神社三座也田心たのこ姫たきつ湍津いづみ姫いづみ市杵嶋いちきじま姫いづみな

り田嶋大嶋澳の嶋三所にしつまりたはします田嶋

の宮司は田嶋の中殿の神を第一田心たのこ姫いづみといひて日

本紀の説により澳の嶋の宮司は舊事記古事記宗像

氏俊か縁起に依て澳嶋の中殿の神を第一田心たのこ姫いづみと

いふたの〱證文故實ありて決一かた一三所と

に三神を祭る其主とする神を中座と一神を客と

して左右とす此説々事長ければ不記田嶋の宮を邊

津宮といひ大嶋を中津宮といひ奥の嶋を澳津宮と

いふ

一宗像大宮司は醍醐帝延喜十四年甲戌清氏勅をうけ

て大宮司となり宗像に下りしより天正十三年乙酉

氏貞卒すに至るまで大宮司七十九世年数九九六百

七十三年に〱て家亡ぬと云々

名寄

つくしなるむなわた山の西にすむ

たきなと君と我をこそいへ 讀人不知

筑紫紀行人のよの未まて守れ千早振

神のみおやのことはの道

宗祇

鐘崎

一鐘崎のうへの高山は湯河山といふ往昔此山の岸に
温湯ありしよし是より名附るともいへり又同郡の
内高倉の権現権の影向ありし所とて影向山ともいふ
一古へ大唐より鐘を積日本に渡りしに此沖にて船を

1479

くつかつし鐘も沈みしとなり夫より名附て鐘の御
崎といふ名所なり沈一時代不知

一宗像七十三代氏佐明應七年春此鐘を取揚て第一宮
の宮前に可奉掛とて三千端の布を赤白黒の三宮に
深ませて綱にねり台大船を数艘うかべて引揚むと
せし事五度龍神たみ給ふにや終に取あぐる事を
不得後の夏には鐘南にかたふきしとなり不思議や
此鐘の内より翁の面一つなつそりといふ面一つ紺
紙金泥の法法米米經八卷太亀太の異甲に乗せて浮び出たり
氏佐得之翁の面を第一宮に奉納しなつそりの面と

法華經は織幡の宮に納られしに其夜織幡山に大波
うち上てなつそり法華經共に海中に入しと也鐘崎
の前は風波常のごとく織幡山に浪の上たりし事は
峯の木の枝に藻屑の掛りけるにぞ知れり翁の面は
今も第一宮の寶物となり雨乞ぬどの時は此面を出
すなり

一元和四年黒田甲斐守長政地の嶋の波戸築せられし
序かつきの蟄四人撰て水底に入りぬ鐘の様子を見
せ給ふに鐘の内甚底く鐘は北面にありて南にかた
ふくと申上る長政聞給ひさらば取あげらるべきと

の儀にて大平駄船四艘に轆轤を仕掛鐘の龍頭に綱
を附沖よりは百艘餘の小船より引せ陸よりは三千
人にて引あげけれともあかりす此時龍頭引かきけ
るともいふ然所に大風類に吹て大船小船浪に漂事
急なり漸波を凌ぎ地の嶋に漕付る是より鐘上は止
ぬ夫より三日を経て鐘崎の獵船十九艘か夫五十七
人乗鐘崎より五里北沖に釣に出る又神の湊波津の
浦芳屋山鹿柏原などいふ浦々よりも鐘崎船同前に
釣に出る風波常のごとくして残五ヶ浦の獵船は
歸帆すれども鐘崎の獵船は一艘もかぐらす船をく

國書刊行會

つかへし五十七人共に死す骸は不残鐘崎の深濱と
いふ所に打寄けるに一人も西の波のむけざるはな
し誠に此鐘は名鐘にて龍神の惜み給ふと古より言
傳へ侍れば其とかめにやと今の世に至まで不思議
の事にいひ侍る鐘の内を見たる海士四人の内二人
は寛文の末まで鐘崎に存命ゐて語けるを聞て書付
侍りものなり

一右の鐘は廻り一丈八尺指渡九といふ詳には知かた

千早振かねの脚崎を過れとも

新六
白波の岩うつをとやひくらく
我はあすれす志賀のすめ神讀人不知

かねの脚崎のあかつきの空

家集
音にきくかねの脚崎はつきもせず
衣笠内大臣

なまこゑた、く渡りなりけり

大名寄
俊頼

聞明すかねの脚崎のうきまくら
夢路も波にいく夜へたてぬ

正三位 義重

1481

920

暮渡るかねの脚崎を行ふねに

我はわすれすふる郷の夢

幽齋

つくーなる鐘の脚崎に浪立は

人のつらさそ思ひやりまゝ

ワナル

佐屋形山

一佐屋形は則織幡山なり延喜式神名帳に筑前國宗像郡織幡神社一座とあり筑前十九神の一也武内大臣の神靈を祭るよし云傳たり文徳實錄三代實錄等の國史に此神に位階を朝廷より贈給ひし事多し此山

1482

鐘崎の民家と去事五町はかり良の方にあり山の形丸くして何方より向ても背面なし林木茂れり海上より見れば其形屋形に似たり故に佐屋形山といふ三方は海一方は^{かた}馬^{かた}地につく山の形うるばくあたかも五の盤上にあるかこと武内宿禰此山の佳境を愛し我死せば此山に神靈は必やすくすへしとのたまふ武内臣は景行天皇御時より六代の帝にかへ政を行ひ其壽三百三十歳仁徳天皇の御時薨せり了代々勲功莫大の良臣なり神功皇后にたかつて新羅を討給へり

國書刊行會

一佐屋形山には宗像家臣黒川刑部大輔隆尚居城す白

山の城といふ山田村といふの内なり
後拾遺
あなふく迫戸の潮あひに舟出して

早くそ過る佐屋形山を 右大辨通俊

夫木
夜ふねこく迫戸の塩干をよ所にみて

月にそ越了さやかたの山 中務

あなし吹さやかた山に雲はれて

月影たゝむ迫戸のしら波

つた

地の嶋

鐘崎と此嶋の間潮干にはいと近し佐屋形山をよ
める歌に迫戸の潮干といふは此間の事なり

一此嶋は往昔船を敷に便なかりしに慶長年中如水波
戸をつか^かせたまふ其後破損せしを元和四年三月十
一日長政又百餘間の波戸を築給ひ客船の助と成事
不可勝計誠は廣大の慈悲とは是なるべしと船人は
言に不及渡海の旅客までよろこばさるはなし此所
すくれて波荒き所故毎年波戸の修覆絶る事なし

つた

大嶋

國書刊行會

1483

名所なり此嶋は安倍宗任配所なり依て安部嶋山
といふとも云

一大嶋は右宗像山の下に記すことく此嶋にも三神を
まつる湍津姫を主神として田心姫市杵嶋姫を客神
とす是日本紀にいわゆる中津宮なり

一中津宮の下になかろ、川を天の川といふ川をへた
て、牽牛織女の社ありいに二星を祭りける所
也と云々

古今
秋風の吹に一日より久方の
天の川原にた、ぬ日はなし

此歌の抄に飛鳥井采雅曰筑紫國大嶋に星の宮とて
北は彗星をいわひ南はたなはたをあわむ二社の間
に川あり天河となづく女を得んとたもへは織女の
宮にこもり男を得んとたもへは彗星の宮にこもる
七月朔日より七日の夜半にいたり河中に棚をゆひ
てた^み上中下三つに水を入れてならへてた^みあ上
中下に男の名を書て祭をしつたらるにうつりたる
にしたかひて其男女をさたむるなり此祭をせんと
て天河原にた、ぬ日はなしといふなりと云々是石
女^{かみ}髓^み腦^{のう}の記も又同し

一大嶋に宗任流され來し時は嶋の西のはななに船着て
上りけるとなり宗任守本尊の毘沙門天を此所に暫
籠置しより今爰を毘沙門會といふ

一宗任は今の安昌院といふ禪院より十町程奥の山中
に居城す此所は四方に峯有て浦風をさゆすにより
廣崎の城といふ又宗任住所なれば安部殿御所とも
云かくて宗任に三子あり嫡子は松浦に渡り二男は
薩州に至る三男は大嶋に有て近郷を領知して宗像
にもしたかはす三十代住ける安部伊豆守氏任とい
ふもの宗像一家と成勢あり宗像恐れて亡さんとす

其時嶋を去て他郷に移る其後宗像より氏任か甥を
取立て大嶋へ渡り主とす其孫安部掃部といふもの
又宗像に敵し戦死す其末葉は農となりて今に大嶋
にあり或は福岡につかへ或糟屋郡薦野すゐのにもありか
の松浦に渡りしは松浦黨の祖なり

一御所山の事は永禄二年宗像氏貞大友に追立られ同
國赤間の赤間か岳より一族を引つれ大嶋に籠城す時此
勝嶋草嶋の勝嶋草嶋とせ毛利元就此事を聞て中國より大嶋に
渡り氏貞に對面す氏貞一かたならぬうれしきに俄
に假屋を立て元就をもてたす依之假屋の跡を御所

と名付たるとなり宗像の記に有之此時の功なる事を
を思れざるにや天正の比筑前立花の城に元就より
捨ころしに入置たる桂左衛門尉元重坂新五左衛門
浦兵部丞宗勝三人の大將を宗像助て中國に歸せし
となり

一同嶋に往昔妙任といふ尼あり宗任七世の孫といふ
信心深く客舩の便にとて波戸を築成就せすして死
す大嶋に飛掛する所の塩干にあらはるゝ比丘尼波
戸是なり

一同所の禪院東寧山安昌院といふは安部氏代々の寺

なり妙任尼の庵室の跡を寺とす宗任常に東國をし
たひて此寺をも東寧山と名付本尊は薬師如來聖徳
太子の御作也

一海雲山久昌院は昔真言宗今は曹洞の禪宗なり田嶋
の育王院の末寺なり

一尺嶋の海士は九州かつきの蜚の初なり宗任流來り
し時東國より附隨ふ家臣板屋万澤豊福といふ三士
初讚州に流されし時海士野の里の海士乙女を召遣
けるを伴ひ來り其業を浦人にたしけるとなり故
に海士の持つあわひかねといふものに大の字を銘

1486

國書刊行會

國書刊行會

に切事大嶋の犬の字なり九州海士の元祖なり故なりと云々

一 元徳二年九月征西將軍築紫へ脚下の時伊豫の河野能嶋來嶋をかたりひて伊豫を掛ぬけ安藝國內の海にて勢揃なり都合三千人兵船五百艘に乗て筑前に下り將軍の御身方申せし時此大嶋に船かゝり是より太宰府に通達致せしといふ

一 津和背といふ所に寛永七年五月十二日異國船一艘寄り來り船中の人しばらく陸に揚り居けるを此嶋の社人一の甲斐四郎左衛門が弟仁兵衛見つけて近

づき尋けり異國人の内日本の詞をつかひ此邊の事とを河山上にある番所をあやみ尋ける故あれば切支丹船などの來るを改るため國主よりたて給ふ所といふ異船の者共ねとろき銀二枚取出し仁兵衛にあたり早く船を出し帆影見ぬ追は爰に居て其後歸候へとたのみて出船す仁兵衛先うけあひ少立やすらひ早速家にかへり兄とあねむこに告其比嶋守村井仁右衛門といふ士一人つかはし置れしか折ふし山に入て居合はすいそき山へいひ遣しければ仁右衛門早き船にのり浦の者共引つれ追懸し

1487

に異船は遠に行のひぬ仁右衛門此嶋の神に祈念し
水主をいさめて急ぐほどに風かはり異船遅々す
所を追付即船を大嶋へ引よせ此由福岡へ申ければ
城下にめしよせて夫より江戸へをくらす都合十人
内一人は耶蘇宗の伴天連ぼてん六十二歳一人はいるま
なり是はえ長崎の者なり又もと京大坂に居たりし
日本人むかし天主國てうこくにわたりて住しが此たび來る
長崎記には伴天連四人いるま一人切支丹五人内
日本人二人と云し其餘みな異國人なり此度の者共
日本へ天主の法をすゝめきため來るよし白狀す江

1488

戸にて籠舎切支丹の目あかしと成ぬると云々異船
にありし銀七貫目江戸よりみな大嶋の村民に下さ
れ村井は國王より賞を賜りける舟に乗出し目原市
郎左衛門が弟九郎次郎は跡にのこりて地嶋鐘崎初
の浦蘆屋若松に觸狀を書て遣し船を出し追かけよ
といひつかはしけり故右之浦々よりと舟数艘出し
けり是又才覺を感じて賞を賜りける
夫木
さりともと身のうき事は大嶋の
源氏國葛
神の心を頼むはかりそ
具氏
舟人も誰をこふとか大嶋の

國書刊行會

紀行
浦かなしくも聲の聞ゆる
濱ちとり聲打をへて大嶋の

波の間もなく誰をこふらん
宗祇

澳津嶋

此嶋俗には澳の御神といふ澳の嶋ともいふ

一是宗像三神の澳津宮なり此御神は第一宮ともいふ

三宮とも云其事宗像山の下に記す舊事記古事記大

宮司氏後縁起の説を以て此所にては此嶋を第一宮

田心姫と稱す此御神の威靈靈言舌に不及種々の音異

あり記すにいとまなし物いみし給ふ所神なればは

の、名もあらはにいふ事ならず僧尼山伏女人牛馬
鹿鼠など皆異名を付て云傳一なり

一此嶋岩をひえ木茂り大竹多しみな岩山なり金あり

山上より對馬朝鮮見ゆる田圃は少しなし大嶋鐘崎

西の浦の澳夫春夏秋冬の間來りて澳す其外の所より

魚獵する事ならず

一大嶋より四十八里ありと云々風波なき春の日には

朝船を出して夕につく四十八里よりは近きかと云

夫々

立波に鼓の音を打そへて

顯伸

國書刊行館

唐人よせぬたきの嶋守

頸中

遠賀郡

一行

日本紀仲哀天皇の記岡鯨主の祖熊鯨市迎のため

周防國に至たる事有筑前凡土記を引て万葉仙覺

抄には鴟舸縣とも書り

遠賀の湊

蘆屋

一神武帝東征の時と先此所に至らせ給ひ仲哀天皇神
功皇后此所に来給ふ事日本紀に見たり安徳天皇
平家に具せられて此所に至り給ふ事平家物語等に

増

見たり

一平家長門の浦にて没落の時何者とは知らずあり
けなき男の誕生して一七夜にはこさと思ふ男子
をいたきて小金作の太刀をそへ蘆屋の何某といふ
ものに此子を養育せよとて渡り置行方不知に成ぬ
蘆屋の何かし是はいかまよし有人子ならくと思
ひ撫育せしを太宰少貳傳聞て我一子なし天のあた
へなるべしと蘆屋の何某かかたよりこひ取て家人
数十人指添て育に其器量平人に替てを見し年
長ければ三韓の押へとして對馬一嶋の主と成たり

1490

國書刊行館

となり今宗の家の先祖是也平知盛の子なりとかや
一蘆屋は岡の湊の南にあり向は山鹿の里也遠賀河其
間をへたつ旅船多く出入して交易の利多く民家に
きかへり東鑑に文治元年三河守範頼豊後豊に渡りて
北條小四郎下河邊庄司に先懸して二月朔日蘆屋浦
にて太宰少貳種丞子息嘉摩兵衛尉と合戦して嘉摩
兵衛討死すと云々

一蘆屋の祇園と稱する宮高倉の社の下宮也後年祇園
を合せ祭りにヤ日本紀仲哀天皇八年春正月筑紫に
幸し給ふ時岡縣主熊鰐御むかひに出し事を記せる

所に田山鹿の岬より廻て岡の浦にいたります水門
に至て御船進む事を得ず天皇熊鰐に向て曰此熊鰐
は明心有てまうけりとき船のすゝまざる事は何
そや熊鰐奏して申まさく御船のすゝむ事を得ざるハ
臣か罪にあらす此浦の口に男女二神あり男神を大
倉主といひ女神を菟つ夫ぶ羅ら媛わといふ必此神の所心な
らんと申す天皇挾抄者倭國菟田人伊賀彦を祝と
て祭りしめ給ひ一かは則御船進む事を得たりとあ
り則此御神なり本社は高倉村にあり大友宗麟耶蘇
宗を歸依して大友領神社佛閣不残焼失せられし時

此高倉兩社も焼失す其後小早川隆景筑前領せられし時造營ありて本社の祭田寄附せられしに其子秀秋の時没収せらる其後及大破一を天和二年太守光之に至り祭田三十石を寄附し給ひ祭礼等執行興起せり

一蘆屋釜屋の元祖は山鹿太郎同左近掾氏は大田氏也山鹿にありし故山鹿の左近といふなり此左近各人にて東山殿より大近掾と稱せらる東山殿の御時能阿彌始て中板のかがりを始し時かな風爐とも此左近に鑄させらること利休の録に見えたり今此末

1492
は同國博多にあり大田次兵衛といふ者にて國主の用を調いにしへにも及ふほどの鑄物師ゆゝ江戸京長崎隣國よりもかれか製を求む寛永の比まては蘆屋にし此鑄物師の末残りしか今は終絶たり
一蘆屋川に入左の方に小嶋二つ有中のうかちたる小嶋をうけ山といふ又いくつき嶋ともいふ神功皇后三韓御退治の時筑紫蘆屋の津に御舩著海邊に岩山あり住吉の明神矢をつかひ三韓にうち勝べぐくは此矢通るべしとて放ち給へは岩山の真中射通し給ふこれよりして此岩をためしの岩と云たるよし箱

國書刊行會
國書刊行會
國書刊行會

崎八幡の縁起にあり何の比よりかうげ山と俗語に

いひならはしたり

蕩 天きりあひひかた吹らし水くきめ

岡のみなとに波たちわたる

蕩兼か抄にひかたとはこち風~~の~~吹やまぬなりと

云々今案に日方東風とて久しくこちふく事あり

蕩兼か説可用

新拾遺 水くきの遠賀のみなとの波のうへに

夫木 教書捨てかへる鴈かね 素撰法師

水莖の岡の湊にたつ波の

ふかき底をはくみてしらく

光置院入道御子

同 月影のやとればこほる水莖の

岡のみなとに秋風そふく 公朝

類聚 ひかたふく音そさひしき水莖の

岡のみなとの秋のしほかせ行尊

草庵 五月雨の日数にまさる水くきの

岡のみなとはさるさはくらん

頓阿

拾玉 津の國のあしやを出し心こそ

慈鎮

1993

此あしやにもかはらさうけれ

善鎮

同 唐國の空もひとつにみゆるまで

あしやの沖にすめり月影

同 行とまる心つくしのおはれさは

あしやの里の松の夕くれ

家集 つくしふね浦塩つみてもとるにも

あしやのねてもしらぬとそす

紀行

塩やかぬあしやの秋そあわれなう

月や煙をいとひそめけん

同 いつきかかんあしやの月の夕しくれ

丸まのいけし 岳間野橋

一蘆屋と山鹿の間南北にわたして往來したる橋なり

大船と橋下を通りしといふ橋をわたしたる跡川の

廣百二十間あり今はたくまのといふたるまを詠

となふなり

藻塩草懐中 嶋つたひとわたるふねの梶間より

落了栗やたりまの橋

浪掛岸

宗祇

同

俊頼

俊頼

訛

蘆屋の北山鹿の成亥なり大波掛小波掛あり

懷中 我袖のぬる、を何にたとへまし

夫木 浪かけのきし世になかりせは

浪かけの浦のねさめにいとしく

物ねとひそふ鴈かねのこゑ 高遠

松の根にあらはれにけり年をへて

いかてくつれぬ波掛のき 祐擧

波津浦 はつうら

一神功皇后御旗を立給ひト所ゆへ旗の浦といひ一を
訛て初の浦といふと云々大旗小旗と云所村中にある

りむかし此山に温泉あり此山をゆわら丸山とも言
筑前名所木綿や間山其所不知此山ゆふ間山にてゆわ
り丸山ととなへ訛れるにや

一此所はかつきの海士住す是より十町程東の濱邊を
内浦濱といふうつら村といふは山中にある

内浦 うちうら

名寄等には鷄濱と書

一内浦濱は垂水越たなみづの東の麓にあり此所にうつら貝と
いふ貝あり嘉摩郡野北の蛤よりし大なり味はたと

れり三四月此波閑なる時瀉海より取あぐるなり
 一此邊に名功の宿とてむかし宿驛ありし跡あり其ま
 きに京橋といふ小橋あり都への往來の道なりし故
 名付了也

一内浦は往來^昔牧有たるよし佐々木宇治川を渡せし生
 食は此所より出たりといひ傳る

一内浦より東の高山は孔大寺山といふ権現たはしま
 す古は九州より内浦郷三十町寄附中絶一處に度々
 神説有て文禄年中に宗像氏貞より内浦三十町寄附
 せらるよし證文あり

一孔大寺権現はいに一儀をそなへたるよし

一岡の松原は原村より黒山村迤長一里ある松原なり
 横四五町或は二三町あり此松原は神功皇后御手つ
 から一木をうゑ給ふより生そひて松原と成といへ

り
 かりそとは思はぬ^概旅をいかなれば
 うつら瀨をは行暮すらん

山鹿

此所は蘆屋と川向なり山鹿より若松迤長五里横
 一里村数二十是嶋郷と言

一同所渡し場の葉山は古城山なり麻生上總介元重居城

一同所より浅川内に入左の高山を日の峯といふ古城山也山鹿兵藤次秀遠より筑前守に至て居城

一山鹿の北柏原浦の西に海をへたて小嶋あり堂山といふ上に蛭子の神社あり又地藏堂あり又此西の嶋内に洞山あり洞内高さ三間半横三間半長十一間南北に通れり奇境也

一枚敷石橋といふあり堂山の西の嶋の内にあり柏原に属す枚敷は海中に長く出たる岩なり其平なる

事恰と枚を敷たるかことし横十二間半長三十二間半あり入江八間あり其上に天成の石橋幅二尺長一丈餘高三尺四五寸此洞山枚敷石橋奇異の境地なり一同所より浅川内といふを小舟は通りて若松に出る海路五里左右無双の境地なり

一安徳天皇太宰府に下りせ給へ共豊後國小形三郎に追立られさせ給ひ兵藤次秀遠を頼て山鹿の城にたはしましけるに又小形三郎追掛奉ると聞召て高瀬舟に召て豊前國柳が浦に著給ふとなり高瀬舟今の丸木舟なるへし浅川内御通船めよし

岩屋

一岩屋のはなを山鹿の脚崎といふ此沖にて潮替る沖に白嶋とて二つあり

洞海

一蘆岩松の間入海通れり松より海士住さては海の南北廣き事半里はかり夫より浅川迄は狭し大船は不通これ洞の海といふくきとは狭き所に水の通るをいふなり水くきの岡の湊などいふも此心なり日本紀に仲哀天皇八年春正月天皇筑紫に幸し給ふ時

神功皇后は別船にて洞の海より入給ふ若松のかたより大渡川通り給ひしなるし潮かれて脚船進まず時に岡の縣主熊鰐更に歸て洞海より皇后をむかへ奉り則脚船のすまさをみて惶懼て忽に魚沼鳥池を作りことく魚鳥をあつむ皇后この魚鳥の遊ぶを見給ひて御心やとけ給ひぬ潮の満るに及て脚船すみて岡津に泊り給ふといへり其上の山に御輿掛の松とて古松三株あり皇后右時しばらく脚輿をかけし所といふ一洞海の南側小敷村境内に太閤水あり秀吉公筑紫に

下り給ひ一時朝鮮陣の門出なる故皇后の吉例とて
 洞の海より入給ふ此時此所にて人をしめて地をほら
 しめ水を得て暫くこゝに脚休有て脚茶をきこしめ
 しけりなり早速石をたみ井とし給ふ其水のさざ
 りしに
 脇浦

一此所に永禄十二年の春唐船一艘漂着す其比遠賀郡
 手野といふ所に吉田越後といふ地侍あり富家に満
 て近江のものを撫育する事又たすものゝ子をおは
 れむか如し依之近江の百姓窮愛さなから一郡の領
 主のよしと然に唐船漂着すよしを聞て一門百姓

引つれ見物の躰にもてなし唐船に取乗唐人共一々
 に切殺し積来る荷物船道具等追うばひとりいふく
 富貴ならふ者なかりしとなり麻生か家臣瓜生左近
 といふ者は吉田越後か妹婿なり越後是をすゝめて
 麻生か幼君を左近にこゝさせ兩人共に宗像に一身
 して家臣と成るよし越後も瓜生も不義不仁のもの
 成しか其末終に絶と云々

黒崎

ツル

一此所は肥後肥前薩摩長崎方々の海道也渡海船多

一 黒崎の上の山を帆柱山といふ昔宇都宮上野介重業居城

一 帆柱山の麓の小篠山を花の尾の城といふ宇都宮上野介帆柱山より此所に居城を替て住す其後原田左近を將監定義正慶年中に籠城といへとも大友にほろほさる夫より麻生重里同民部隆守まで居住す麻生は遠賀千町の旗頭たりしよし

一 黒崎の古城は黒田長政の入國の後豊前境の守禦のため藤田村今黒崎に城を築て家臣井上周防之房を

置了二万石の采地を給ふ此時までは藤田村なり城を黒崎の城と稱す城山の南に黒崎といふ所ありし故なり其後城の名に依て町をも黒崎となふ妙見社あり故此山を妙見山ともいふ此城も元和一國一城と成て破る

若松
大渡川 附鳥旗

一 若松渡場の嶋を中の嶋といふ長政此城を築て家臣三宅若狹といふものを置了中嶋の城と稱す元和元年公命にて諸國端城を破られし時此城も破す

1500

國書刊行會

一若松より半里ほど西小田といふ所あり此上の山は
古城山也大場隠岐守といふもの居城す時代不知
一文明十二年宗祇紀行に筑前國若松の浦といふにつ
きぬ則此所ししま人麻生何かし兄弟あ了寺に正法寺と
云寺也今はむかへとりぬかた山かけてうえ木こた
かきかけあり内外の海を見るに塩やの烟暮わたる
入日影にうつろふほど又いふかたなし此二人は將
軍家に奉公の人侍れは郡の物語こまやかたして
色々の肴とめ出たるほとこよろきのいろかはし
さよたもひやらる盃かさなりさし出る月の光もた

いならす今宵は十三夜なれば
名やたもふこよひしくれぬ秋の月

一 大渡川は若松の入海の口若松ととはたとの間なり
これ一向海なりと見ゆれども遠賀川のなか出た所
なり鹹淡相交るゆへ寒氣甚時は氷る事あり慶長年
中一度寛永年中一度氷たるといふ近くは天和三年
十一月晦日より雪ふり師走の四日五日まで寒氣甚
しかりしに此川水も氷りて船の往來絶たり大渡川
といふ事むべなりこれ神功皇后の御船通りし所な
り

古今六帖

つくしなる大渡川たほかたは

我ひとりのみわたるうき世か貫之

一鳥旗は若松のむかひ海をへたつ戸畑と書されとも
万集仙覺か杵に筑前風土記を引て鳥旗と書り正字
なるし名護屋崎は鳥旗の出崎なり日本紀岡織主
熊罴申けることばにも名護屋大渡を以て西門とす
とあるも此所なり仲哀天皇の御船をむかへ案内
し奉らんか為に百枝の賢木を抜取て九尋の船の舳
に立上枝には白銅鏡をかけ中枝には十握の劔をか
け下枝には八尺瓊をかけて周防國沙歷浦に参迎て

1502

三

市田尻今は魚塩の地を獻了因て奏して曰穴門長門也
より向津野大濟に至るまでを東門とし名護屋大濟
を以て西門とし没利嶋阿閉嶋長門にあり記す今は
嶋をはあひを限て市管と一柴嶋を割て御瓶と一逆
見海を塩地とすと云々柴嶋逆見遠此ことは只廣く
天下をしらしめすへきとの祝言に熊罴か申けるこ
とはなりと釋日本紀に記せりされは此なこや大濟
より皇后市船を入給ひすてにして三韓を討平らけ
應神帝を御誕生ましつるに香椎の宮に神と
まり箱崎宇美の宮居にあとをたれ行ひて長く異國

國書刊行會

江由司帆草一巻

降伏の威靈をあらはし給ひ日本を守護し給ふ事ありかたき所ちかひ其ためしある當國也国主長政の時よりこのかた此若松の湊より船出して江府に参詣し又歸國の時も此所より上陸し給ひて福岡に著城し給ふ事めてたき恒例にして海路千里の波もなごかの崎のなごやかに船をうかべ大渡川の絶る時なく若松の葉色も万歳のみとりをそふらめ了

萬

靈

